

リッカルド・ムーティ指揮 東京春祭オーケストラ

曲目解説

モーツァルト:交響曲 第35番《ハフナー》

モーツァルト晩年のウィーン時代(1781~91)に書かれた6つの交響曲は、この《ハフナー》に始まる。原曲は1782年、父レオポルトの仲介によりザルツブルクの名門ハフナー家のジークムントが爵位を受ける祝典用に作曲されたセレナードだった。実はモーツァルトは、それ以前に同じハフナー家のエリーザベトの婚礼のために8楽章からなる「ハフナー・セレナード」を作曲している。したがって1782年に作曲されたのは「第2ハフナー・セレナード」とも言えるもので、6楽章からなっていた。ところが1783年春、モーツァルトは自身の演奏会用に交響曲が必要となり、第2セレナードから4つの楽章を選んで、交響曲へと改編した。これが交響曲第35番《ハフナー》である。初演は皇帝も列席するウィーンのブルク劇場でモーツァルト自ら指揮して行なわれ、大成功を収めた。

第1楽章は、単一主題による変則的なソナタ形式。2オクターヴに及ぶ力強い跳躍によって華々しく幕を開ける。第2楽章は、優美なアンダンテ。軽やかな足取りで2拍子を刻む。第3楽章は、ウィーンの気品が香るメヌエット。中間のトリオでは、木管楽器が古風な音色を添える。第4楽章は、ロンド・ソナタ形式。第1主題は、初演されたばかりの歌劇《後宮からの誘拐》のアリアにもとづいている。

モーツァルト:交響曲 第41番《ジュピター》

モーツァルトの最後の3つの交響曲は、1788年夏のわずか1カ月半のあいだに作曲された。この第41番が完成したのは、前作の第40番から2週間あまり後の1788年8月10日。「ジュピター」とは、ローマ神話の主神ユピテルの英語読みで、これは興行師のヨハン・ペーター・ザロモンが名付けたとされるが、本曲のスケール、緻密ながらまったく自然な造形美、明朗な精神の息づく曲想など、いずれもその名にふさわしく、古典派交響曲の傑作の通称として定着している。

第1楽章は、ソナタ形式。第1主題は、16分音符の3連符をとまなう決然としたハ音の連打と、一転してやさしい表情の旋律の2要素からなる。半音階の上昇で始まる第2主題は、

木管のオブリガートに支えられてふくよかさを増し、やがて迎えるコデッタ(小結尾部)では、オペラ・ブッフア風の旋律が現われ、展開部ではこの主題がおもに用いられる。第 2 楽章は、弦楽器が弱音器をつけて美しい旋律を奏でる緩徐楽章。透き通った美しさのなかに、微細なニュアンスが込められている。第 3 楽章は三部形式のメヌエットだが、ここで再び「ジュピター」の壮大な音楽に引き戻される。まるで前楽章の天国的な世界から舞い降りてくるように、下降する旋律で始まる主部に対し、ユニークな楽想のトリオの後半では終楽章の第 1 主題が先取りされる。第 4 楽章は、フガートを取り込んだソナタ形式。モーツァルトの好んだ音型 C-D-F-E(ド・レ・ファ・ミ)の第 1 主題で開始される。対位法とポリフォニックな書法による見事な構築は特筆すべき完成度を誇る。最後のコーダではすべてのモチーフが登場し、壮麗な大団円を迎える。